

# 河川財団

河川財団ニュース  
Newsletter from The River Foundation

NEWS

平成29年1月発行

No. 49

## アクティブ・ ラーニングと 河川教育

プロジェクトWETの  
今後の展望

特集

+

INTERVIEW

### 私の、プロジェクトWET活用術

2016年度ミス日本「水の天使」須藤 櫻子さん

コノ人に聞く

### 新たなステージを迎えた河川施策

国土交通省 水管理・国土保全局長  
山田 邦博

Hot Topics

### 「何が起こるか」を知り、自らを護る

公益財団法人 河川財団 理事長  
関 克己



公益財団法人

河川財団



表紙写真

「千葉県水道局給水 80 周年記念フェスティバル」でプロジェクト WET を活用するミス日本「水の天使」須藤 櫻子さん

## 特集



## Contents

- 03 **コノ人に聞く**  
**新たなステージを迎えた河川施策**  
国土交通省 水管理・国土保全局長 山田 邦博

- 04 **Hot Topics**  
**「何が起こるか」を知り、自らを護る**  
公益財団法人 河川財団 理事長 関 克己

- 06 **アクティブ・ラーニングと河川教育** - プロジェクト WET の今後の展望 -

- 12 **INTERVIEW**  
**私の、プロジェクト WET 活用術**  
2016 年度ミス日本「水の天使」 須藤 櫻子さん



### 河川ラボ

- 14 **流域から学ぶ河川教育とそのツール**  
河川財団名古屋研究発表会概要報告

- 16 **堤防植生の生物多様性への役割**

- 18 **天然記念物イタセンパラの保全に関する調査・研究  
淀川管内の河川レンジャーの近年の取り組み**  
河川財団近畿事務所研究成果発表会概要報告

### パークニュース

- 20 **三世代（親・子・孫）が同じフィールドで  
楽しめる手軽なスポーツ、パークゴルフ**



### 河川教育

- 22 **水難事故防止に向けた広報**

### 河川基金

- 23 **河川基金発表会のお知らせ**  
平成 28 年度「川づくり団体全国事例発表会」および「河川教育研究交流会」の開催

## 新たなステージを迎えた河川施策

国土交通省 水管理・国土保全局長

山田 邦博



明けましておめでとうございます。

昨年中は、河川行政全般にわたり、ご支援、ご協力をいただきありがとうございました。

さて、昨年は熊本地震を始め、梅雨前線豪雨、台風第7号、11号、9号、10号、12号、16号と6個の相次ぐ台風上陸や鳥取県中部地震、福島沖地震など自然災害が相次ぎました。特筆すべきは、昭和26年に気象庁の統計開始以来、初めて北海道に3つもの台風が、暴風域を伴ったまま東北の太平洋側に上陸したことです。東北の太平洋沿岸を含め、日本海沿岸の海水温が高く、台風が衰えないまま北上したのです。

このため、地域によっては、これまでに経験したことのない激しい雨が降りました。例えば、道東では平年の2～4倍を超える約500mmの降雨を経験しました。また、短時間ではありますが、降雨強度が非常に高い雨、いわゆる「ゲリラ豪雨」が頻発し、このような雨に弱い中小河川においても甚大な被害が生じました。

一昨年の関東・東北豪雨を踏まえ「施設の能力を上回る洪水は必ず発生する」との認識に立って、ハード・ソフト両面の対策を進める「水防災意識社会の再構築」を直轄河川に対し進めていましたが、昨年からはこの対象を中小河川にも拡大し、取り組みを加速化しているところです。

また、昨年の災害を受け、「中小河川等における水防災意識社会の再構築を如何に進めていくべきか」について社会資本整備審議会で検討され、危機管理型の水位計の導入などによる確実な避難の実現、既設ダム等の既存ストックを最大限活用した治水対策、関係機関が総力を結集した復旧支援等が提言されています。

このように、雨の降り方が新たなステージを迎

えたとされる中、新たな治水対策を実際に進める一年にしたいと考えています。

一方、河川整備については、防災・減災という考えだけではなく、地域の災害リスクを軽減することを通して、サプライチェーンや生産拠点の安全安心を確保し、地域社会の生産性の向上にも貢献するものです。昨年、国土交通省の生産性革命本部の新たなテーマとして、「ダム再生」が追加されました。

昨年は、首都圏や四国地方、愛知県東部などで、深刻な渇水が生じました。幸い、ギリギリのところ、降雨があり、大きな被害は生じませんでした。関東の渡良瀬川と鬼怒川で最大20%、四国の吉野川では最大35%の取水制限が生じました。

また、「ゲリラ豪雨」が頻発していますが、このような降雨にはダムのような貯留型の治水施設がより効率的です。

このため、既存の施設を「賢く使う」という観点も含め、ダム本体のかさ上げや、貯まってしまった土砂を排出する排砂バイパスの増設などを行う「ダム再生」を進めていきたいと考えています。

ダムより下流の河道が改修され、ダムの放流量を増やすことが出来るようになったこと、降雨予測精度が向上し、事前放流がより長時間可能になったこと、大水深での堤体削孔技術等新技術が開発されてきたことなどによりダム再生の幅は広がっています。

このように、雨の降り方も新たなステージを迎えているところですが、河川施策もまた新たなステージを迎えようとしています。皆様のご支援をいただきながら、今年はこのような新たな取り組みを大きく進めていきたいと考えています。

# 「何が起こるか」を知り、自らを護る。

公益財団法人 河川財団 理事長 関 克己



平成 27 年 9 月関東・東北豪雨災害 写真提供 株式会社パスコ

近年の水害で、「我が家が浸水するとは思わなかった」、「堤防が壊れるなんて考えてもみなかった」等の声が地域の住民の方々からだけでなく、場合によっては防災行政に関わる人からも発せられています。これは、災害対策の基本である「何が起こるか」というリスク評価が社会で十分共有されていない状況を示しています。水害対策は、多くの主体によって進められるため、水害のリスク評価が広く知られ、理解されることで初めて対策が有効になります。地球温暖化に伴う気候変動に起因する自然災害の激化が進む中、今まで経験したことのないような災害の発生が世界で、日本で増えています。それぞれが、自分に、地域に、「何が起こるか」を、あらかじめ知るために、災害リスク評価の担う役割はさらに大きくなっています。

地球温暖化に伴う気候変動について、IPCC第5次報告書では「気候システムの温暖化は疑う余地なし」と明確に示されました。氷河や南極などの氷の融解、蒸発散量の増加、積雪量の減等による海面の上昇、台風の強度増加、豪雨や渇水の発生頻度の増加、洪水の増大、高潮の頻発、海岸浸食、土砂災害、渇水の危険性等の激化が予測されています。こうした中で、日本国



水害リスクに対応した土地利用の誘導・規制がよく例に出されますが、実情は例外的に行われている程度であり、今後の水害の激化に対応し効果を発揮するような仕組みとはなっていません。今でも、水害に対し危険な区域に住宅や施設が新たに建てられています。

災害リスクと社会・経済活動をリンクさせることを目的とした法制度に基づく周知の枠組みは、平成11年の広島の土砂災害を受けて制定された土砂災害防止法と東日本大震災後に制定された津波防災地域づくり法の2つです。こうした枠組みを水害にも取り入れることが必要ではないでしょうか。仕組みとしては、リスクを土地利用や建物構造に直接的にリンクすることも考えられますが、社会への混乱を招くおそれもあることから、先ず、不動産の売買や大規模構造物や医療・福祉施設の建設において、その土地のもつ水害リスクの説明責任等を義務づけ、先ずリスクを知ったうえで各主体の行動に期待することから始めることが考えられます。津波防災地域づくり法に基づく津波災害警戒区域を指定した徳島県では、地域に対する具体的なリスク評価とその公表を受け、リスクを受け止めた住民が家の建て替えを契機に、安全な区域に移転する等の動きが明らかになっており、水害対策においてもこうした取り組みの構築が急がれています。

日常的な社会・経済活動と比べて自然災害の発生頻度は低く、リスク情報を関係主体が自ら収集するインセンティブは一般的に低いといえます。このため、災害リスク情報を社会で共有するにあたっては、リスク評価の実施とその社会的周知、社会・経済活動とのリンク等を法制度に基づいた枠組みを設け、「リスクを知り、自らを護る」ことをさらに進めていく必要があると考えています。また、総合的な治水対策として、

度が、1/30程度と大きく低下することとなります。治水安全度の低下、水害の激化を通じて地域の社会・経済活動に極めて大きな影響を与えることが危惧されるレベルです。今後発生すると予測される厳しい状況に対するリスク評価を行い、これを社会的に共有することが求められています。そして、今年発生した、北海道、東北の激甚な災害を繰り返さないため、対策の強化が急がれます。

内の地域別の降水量増加率に関する検討が、平成20年の「地球温暖化に伴う気候変化への適応策のあり方について（社会資本整備審議会）」でなされ、日本の日最大降水量は全国的に1.07〜1.24倍とすることが予測されています。この影響は地域により異なり、特に北日本において大きく、北海道や東北では1.2倍以上になります。これを河川の治水安全度で見ると、北海道において現在1/1000の安全

## 特集

# アクティブ・ラーニングと 河川教育

## - プロジェクト WET の今後の展望 -

次期学習指導要領に関する目玉の一つ「アクティブ・ラーニング」の導入に代表されるように、今後教育界では「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」がさらに重要視されるようになります。約 30 年間参加者主体の教育方法を提唱してきたプロジェクト WET とこのアクティブ・ラーニングとの関係を中心に特集します。

### 転換期を迎える学校教育

今、学校の教育現場は大きな転換期を迎えようとしています。教員が説明しながら黒板に書き記し、それを児童・生徒がノートに書き写す、という知識を効率的に伝達するスタイルの授業に私たちは慣れ親しんできました。ところが、小学校では 2020 年度から、中学校では 2021 年度から全面实施される次期学習指導要領に関する目玉の一つ「アクティブ・ラーニング」という概念がその授業スタイルを様変わりさせようとしているのです。

例えば、45 分の授業の中で、教員の説明や知識の伝達をする時間はできるだけ減らし、与えられた課題などに対し、児童・生徒がグループを作って協力しながら取り組むなどの演習の時間を増やすこと、目標を達成できたかどうかを個々で振り返る時間を設けるなどをし、学びを促すための工夫を盛り込むことなどがあります。

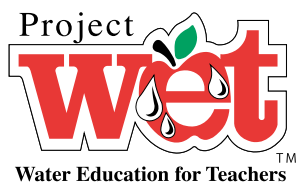
もちろんこれまでも総合的な学習の時間などの教科でも対話したり討論をしたりする演習形式の授業が行われてきました。それが理科や社会、算数や国語など全ての教科で「アクティブ・ラーニング」を導入して、児童・生徒が「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」などの視点で授業が組み立てられるようになります。ですが、このようなスタイルの授業が浸透するには多くの時間と試行・実践



### プロジェクト WET (Water Education for Teachers)

全世界 66 以上の国と地域で普及されているワールドワイドのプログラム。「アクティブ・ラーニング」の要素を持ち、模擬体験や協同学習をベースとしたプログラム。日本では河川財団が事務局となり、全国で約 8000 人が指導者として登録されています。

水の衛生、水の利用、水の特性、水循環、地下水、河川、流域、水防災、文化等、水に関する様々なテーマを扱った 200 を超える「アクティビティ」は、学校の授業、地域のイベント、出前講座、野外活動等、様々な場面で活用されています。



2009 年からプロジェクト WET が協力している  
「みずのがっこう (主催：一般社団法人 Think the Earth)」の  
一コマ (場所：IID 世田谷ものづくり学校)  
写真提供：一般社団法人 Think the Earth



の場が必要になるでしょう。

そこで注目されてくるのがグループ学習や対話・討論といった学習スタイルに合う既存のツールやプログラムで、協同学習や体験学習といった様々な手法がその代表となります。「アクティブ・ラーニング先進国」である米国で開発されたプロジェクト WET (Water Education for Teachers) は、グループによるディベート、ロールプレイング、シミュレーション、実験、調査、実演などの指導方法を用いた水教育のノウハウがパッケージ化されたプログラムで、「主体的・対話的で深い学び」が得られるような様々な工夫がされています。

### 世界に広がるプロジェクト WET

1984年に米国ノースダコタ州水委員会によって創設されたプロジェクト WET は、米国内務省開拓局の資金でモンタナ州立大学を中心に他の州そして全米へと展開されました。現在プロジェクト WET 財団により、世界 66 以上の国と地域に広がりをみせているワールドワイドの水教育プログラムへと発展し、その教材はアラビア語、フランス語、ハンガリー語、日本語、中国語、韓国語、ポルトガル語、スペイン語など多言語に翻訳されています。

近年では NASA や国連の専門機関の一つである世界気象機構 (WMO) 等と連携して土壌の水分量や水防災に関するプロ



「驚異の旅」に使用する水のサイコロ  
海・雲・川など9つのポイントにそれぞれ固有のサイコロがあります。



水の行方の可能性の度合いに応じたサイコロの面（上は「海」のポイントにあるサイコロ）



プロジェクトWETの代表的なアクティビティ「驚異の旅」  
子どもたちが、水の分子となってサイコロを転がし、すごろくのように地球上の水循環を体験。  
アクティビティを通じて私たちと水との関係を学びます。

プログラムを開発したり、米国ネスレ・ウォーターズやリーバイス、エコラボ等の企業や団体と連携して様々な地域での水問題に関する取り組みや教材開発などを行なっています。こうした取り組みが評価され、プロジェクトWET財団は、2013年のThe Global Journalが選ぶ世界のNGOトップ100に選出されました。またプロジェクトWETの教材は全米理科教師協会(National Science Teachers Association: NSTA)の推薦を得られるなどし、世界各地で大きな成果を挙げています。

### 教育方法と身につけられるスキル

プロジェクトWETの基本となるのはその教育方法にあり、教材となるプロジェクトWETカリキュラムアンドアクティビティガイドには以下のように記載されています。

- ・ 水資源について実際に体験し、調査し、簡単に応用できる方法を通して知識を広められる。
- ・ 水について教えるだけにとどまらず、アクティビティを通じ、チームワークや決断力、問題解決の方法など、児童・生徒の自然な好奇心に沿って21世紀に大切な様々なスキルも身につけられる。

### 豊富な種類のアクティビティ

プロジェクトWETの代表的なアクティ

ビティに「驚異の旅」という水の循環を体験するプログラムがあります。水のサイコロを振りながら雲や海、川、湖、地下水、植物、動物など、地球上に水が存在する様々なポイントに自分自身がコマとなって移動します。さながら巨大なスゴロクのように、水の分子になった子どもたちが、時には雨となって陸地や海に降り注いだり、土の中の水が植物の根に吸い上げられて、雲へと蒸散します。また、地下水となった水分子がしみ出してやがて川の水となりが大海原へ辿り着くなど、ダイナミックな水の旅を体験するプログラムです。

各ポイントに設置されたサイコロには水の行方の可能性の度合いに応じて出る目が異なり、例えば海のサイコロは蒸発して雲になるか、広い海をそのまま漂うかの行き先しかありません。このような仕掛けにより、海と雲を行き来するという水循環の大部分を占める旅を体験する子どもや、雲から湖、湖から川を経由し私たち動物が利用するという旅を体験する子どもなどがおり、毎回異なる水の軌跡を描くことができます。

日本に住む私たちは蛇口から出る水がどこからやって来るのかを普段から意識することはあまりありません。学校で行う場合には、自分の水の旅と他者の辿った水の旅との違いについて対話したり、なぜそのように水が移動を行うのかについてグルー





Think the Earth Project主催「みずのがつこう2010」事業において、ららぽーと(豊洲・磐田・TOKYO-BAY・新三郷・柏の葉)及びラゾーナ川崎にてプロジェクトWET アクティビティ「レイNSTイック」を実施(2010年7-8月)



東京ガスの企業館「がすてなーに ガスの科学館」が主催する春休みイベント「海でつながる島国日本! 私たちと海の意外な関係?!」でプロジェクトWET アクティビティ「青い惑星」を実施(2016年3月)

プで話し合うなど、このようなゲーム形式のロールプレイングを行うことで、私たちと水との関係について自分たち自身で気づき、さらなる探究心を促すことができます。

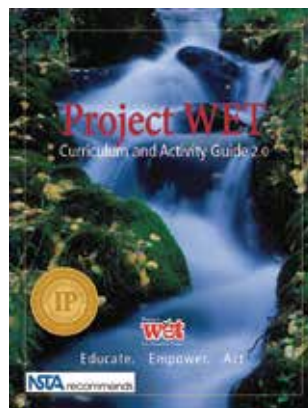
他にも、川に面した土地を開発し、川に与える影響を考る「塵も積もれば」や地球儀型のビーチボールを投げ合い、海と陸の表面積の比を確かめる「青い惑星」、クリップを水に浮かべたりして、水を使った様々な「競技」を行い、水の物理的性質を学ぶ「水リンピック」、ミステリーの謎解き形式で水を媒介とする病気について考える「殺人鬼は誰だ?」、鬼ごっこや椅子取りゲームに近い遊びで、水辺の動植物の在来種と外来種との関係を考える「侵入者!」など100を超えるアクティビティは、水循環、流域、水の物理的・科学的特性、水と衛生、水と社会、水と文化、水防災など様々なテーマを対象としています。

### 企業や自治体、学校等の活用事例

プロジェクトWETの活用方法も様々です。ネスレ日本株式会社は2012年から工場を中心にプロジェクトWETを活用した活動を行なっています。工場近隣の小学生を対象に、水や水資源に対する知識、理解と責任感を深めてもらうような活動に取り組むなど、プロジェクトWETは企業が行う様々な活動やイベントで活用されています。



プロジェクトWETのアクティビティ「水リンピック」競技形式で水の性質を学ぶ。



全米理科教師協会(National Science Teachers Association: NSTA)の推薦を得たプロジェクトWETの教材。2013年 Independent Publishers Book Awardsのゴールドメダルも受賞。(写真:プロジェクトWET財団HPより)

自治体の例としては福井県高浜町の若狭和田ビーチが、ビーチやマリナーの国際環境認証「BLUE FLAG」を取得するため、審査項目の一つである「環境教育」をプロジェクトWET等を活用して基準をクリアし、2016年4月14日に国際環境基金(本部:デンマーク)の審査を経て、アジアで初めて認証されました。

他にも文部科学省スーパーグローバルハイスクール(SGH)指定校の静岡県立三島北高校では、国際的視野から地域課題を解決できるグローバルな人材の育成を目指すため、地域の水問題を英語で学ぶためにプロジェクトWETなどを活用した水教育を行なっています。

さらに、大学などの正規の授業においてプロジェクトWETの講習会を実施する場合には、「プロジェクトWET導入校」に登録することができます。これまでに北海道教育大学、酪農学園大学、弘前大学、茨城大学、武蔵野大学、和光大学、東京農工大学、玉川大学、愛知教育大学、愛媛大学など教育学部を中心として各地の大学・専門学校が「プロジェクトWET導入校」として登録されています。

### 普及・推進を担う指導者

プロジェクトWETの普及・推進は約300名のファシリテーター(上級・普及指導者)がその中核を担っています。ファ



文部科学省スーパーグローバルハイスクール(SGH)指定校の静岡県立三島北高校

同校では地域課題であり世界的課題でもある「安全な水の確保」をテーマに大学・企業と連携して開発したプログラムによって、社会課題をグローバルな視点から解決できる人材を育成することを目標としています。2016年4月には「私たちの生活と水」をテーマに水循環を学ぶプロジェクトWET「プレートトラベラー」及び地下水汚染を学ぶ「重大な過ち」を実施。国際プログラムの特性を活かし、扱うワークシート等はすべて英語で記載された教材を使用しました。その後、各自が地域の水問題について課題を設定し追求するという「アクション・エデュケーション」につながる活動へと発展させています。



「BLUE FLAG」として認証された福井県高浜町の若狭和田ビーチ(写真:一般社団法人若狭高浜観光協会HPより)

「環境教育が盛んな町として認証されれば、人口の増加にもつながり、子どもたちに自然やまちづくりに対して興味をもってもらうことで、地元愛を育むことにつながる」として、高浜町では、これまでにプロジェクトWETの指導者講習会を開催(2回)し、上級・普及指導者である「ファシリテーター」資格を関係者(2名)が取得しました。また、町のふれあい広場や子ども会でプロジェクトWETを活用するなど、「高浜らしい海の教育活動」を広げています。



2016年12月の第16回プロジェクトWETファシリテーター(上級・普及指導者)講習会受講者



プロジェクトWET講習会におけるピア・ティーチング(実習による仲間同士での学び合い)の様子。

シリテーターは大学や小中高の教員、民間企業、行政職員、学生やボランティアなど様々な職種の方々がいます。プロジェクトWETの一般指導者(エデュケーター)となるには6時間以上の講習会を受講する必要がありますが、その講習会を開催するのが全国各地のファシリテーターです。

一般指導者(エデュケーター)となる講習会では、プロジェクトWETのアクティビティ体験や子どもたちへの指導方法を学ぶだけでなく、グループワークやプレゼンテーション等のトレーニングを行います。その過程で参加者自身のコミュニケーション能力、表現力、発表力の向上や問題解決能力等が磨かれます。いわば講習会自体がアクティブ・ラーニングの要素を持っているのです。

平成15年から27年度までに約600回の講習会が開催され、約8,000人が一般指導者(エデュケーター)として認定されました。その一般指導者が、学校現場や企業活動、行政による出前講座、イベントなど全国各地でプロジェクトWETを活用した活動を実施しています。

### 学校教育での活用に向けて

各学校で教育課程(カリキュラム)を編成する際の基準となるのが学習指導要領です。そのため学校現場で他の教材を取り入れようとする場合には、学校教育の基本と

なる学習指導要領との対応が重要です。プロジェクトWETでは平成20年度に、プロジェクトWET有資格者のうち、小中高등학교や大学の教員、教育現場に関わる方々などの関係者で構成される「学校カリキュラム適合委員会」を立ち上げ、プロジェクトWETと理科や社会といった各教科の単元との関連性を検討し、また学校で授業を展開する際の事例を収集して事例集としてまとめました。例えば「驚異の旅」では小学校3・4年社会の「生活に必要な飲料水」や中学校理科の「霧や雲の発生」との関連性が高く、授業で活用することにより児童・生徒のより主体的で対話的な深い学びが得られることが期待されます。

### アクティブ・ラーニングと

#### アクション・エデュケーション

次期学習指導要領では児童・生徒が「何ができるようになるか」を明確にしながら「何を学ぶか」「どのように学ぶか」という学びの過程を組み立てていくことがこれまでに以上に重要視されるようになります。

「何を学ぶか」「どのように学ぶか」については、プロジェクトWETではインタラクティブ(対話式)で、多感覚を活用した様々なアクティビティを通じて一人一人の気づきを重視する進め方をパッケージ化しており、これが今後学校教育で推進される「アクティブ・ラーニング」という概念と

合致していると思われる。

さらに「何ができるようになるか」について、プロジェクトWETでは「行動と解決へ導く認識と教育」として「アクション・エデュケーション(Action Education™)」を提唱しています。

「アクション・エデュケーション」はそれぞれの地域での水問題を取り上げ、積極的に対処し、的確な行動を起こすために必要な知識を提供し、学ぼうとする人の助けになるように考えられた教育活動を指して

います。プロジェクトWETのアクティビティは、得た知識を地域にとって意味のある改革をもたらすために応用するきっかけとなるような工夫がされているのです。

プロジェクトWETでは「体験型の水教育」を通じて、これからの時代に求められる資質・能力の向上と持続可能な未来に向け、すべての子どもたちに水とその価値について考えてもらう世界の実現を目指しています。



#### アクティブ・ラーニングの実施例

水ジャーナリストでプロジェクトWET指導者でもある橋本淳司氏が、昭島市の小学校でプロジェクトWETのアクティビティ「重大な過ち」を実践されました。

子ども達からは、「地下水を利用するときにはきちんと水質調査をするべき」、「地下水は流れているので、汚れた井戸の近くの工場が汚染の原因とは限らない」、「良いと思って使った薬品がずっと後になって地域に悪い影響をもたらすこともある」といった意見が挙がりました。

水の勉強をするだけでなく、「情報を共有する」「グループで問題を話し合う」「課題を発見し修正する」といったことも学び、今後学校教育で重要視される「アクティブ・ラーニング」の視点につながる授業が展開されました。

## 2016 年度 ミス日本「水の天使」

須藤 櫻子 さん



講習会のグループワークでアクティビティ「水リンピック」に取り組む須藤さん

# 私の、 プロジェクト WET 活用術

INTERVIEW

須藤さんは2016年の春にプロジェクトWETのエデュケーター講習会を受講し、エデュケーターとして認定されました。その感想をお聞かせ下さい。

受講前は講義形式の講習会なのかなあというイメージを持っていましたが、実際に参加してみたら体を動かしたり、グループで作業をしたりと、楽しみながら水の事を学ぶことができました。

特に「アイスブレイク」と呼ばれる参加者同士の交流後はグルー

プ内の意見交換等が活発になり、すぐに打ち解けられることができました。

たくさんあるプロジェクトWETのアクティビティは、色々な切り口で水の事を扱っていてとても驚きました。特に印象に残ったアクティビティ「塵もつもれば」では、河川への影響を与える人間の行為等が汚染チップで表現され、それが下流に集まることで膨大な量になることなどを学びました。

ミス日本「水の天使」は、水の大切さを様々なチャンネルで伝える活動を行っており、水について分かりやすく伝えるツールとしてプロジェクトWETを活用しています。

今回、2016年度ミス日本「水の天使」須藤櫻子さんにその活用術についてお話しを伺いました。

2016年度ミス日本「水の天使」須藤櫻子さんのプロジェクト WET 活用術



01

プロジェクト WET 講習会の受講・資格取得 (5/1)



02

「下水道展'16名古屋 (7/26)」で  
アクティビティを活用

(写真提供：ミス日本コンテスト事務局)



03

「こだいら環境フェスティバル 2016  
(9/10)」でアクティビティを活用

(写真提供：ミス日本コンテスト事務局)



04

「千葉県水道局給水 80 周年記念  
フェスティバル (10/30)」でア  
クティビティを活用

**その後のイベント等でプロジェクト WET のアクティビティを実施してどうでしたが。**

ミス日本「水の天使」としてこれまで子どもたちを対象としたイベントでは、コップに入った地下水の水を使って理科の実験等を行っていました。

地球儀型のビーチボールを投げて海と陸の割合を探るプロジェクト WET のアクティビティ「青い惑星」では、陸と海の割合が本当に 7 : 3 となり参加者が驚いていました。短時間のイベントでも活用でき、誰でも参加できて人数に左右されないアクティビティなのでとても使い勝手がよかったです。

水のサイコロを投げて地球上の水循環を体験するアクティビティ「驚異の旅」はこれまでに 2 回イベントで活用しました。イベントの実施前は幼児から大人まで参加者の年齢層の幅が広いと聞いていたのでどのような内容とするか悩みました。実際には小さな子どもには保護者がついていたので安心して実施できました。それでもできる限り難しい用語は使わず、簡単な言葉に置き換える等の工夫や、事前にセリフや流れなどのシミュレーションをして練習しています。受講したエデュケーター講習会の

グループワークではガイドブックを読み解き、自分たちの工夫を凝らしてアクティビティを実施するなどの経験ができ、応用力を得ることができました。そのため、見たことのない初めてのアクティビティでもガイドブックを読めば実施できそうな印象があります。

**今後の抱負をお聞かせください。**

プロジェクト WET のエデュケーターの資格を取得することで、イベント等の出演依頼があった際に私の方から体験型のプログラムを提案できるようにになりました。プロジェクト WET のアクティビティを活用すると、楽しい場面を演出しながら主催者の思いや主旨をお伝えすることができます。「水の天使」としての役割にはもちろんプラスですし、私だけでなく表に立つ役割を持った多くの水関連の方々にとって、プロジェクト W

E T は強い味方になると思います。大学卒業後の就職先は商社で、途上国等の水インフラにも関係している事業も扱っています。配属先は未定ですが、そこでもプロジェクト WET を活用できる場面があるかもしれないと思います。

私のミス日本「水の天使」としての任期は平成 29 年 1 月末までですが、OG になってもイベントのピンチヒッターを務めることもあるかもしれません。

プロジェクト WET の内容を更に分かり易く PR することができればもっと多くの人に興味を持ってもらえると思います。私の周りにも小学校の教員になるという人がいますが、そういった教育大学の学生にも周知をすれば効果的かと思います。

プロジェクト WET の良いところは、「どこでも、誰でもできる」ことではないかと思っています。



2016 年度ミス日本「水の天使」須藤櫻子さん

東京都出身の大学生。趣味は旅行、作曲、フルート。2016 年度の 2804 名の応募者の中からミス日本「水の天使」を受賞。

ミス日本「水の天使」は水の広報官として、生命の豊かさを支える美しい水のための人々の努力と、世界の水インフラの発展に貢献できる日本の素晴らしい経験と技術をわかりやすく伝える役割を担っている。

本年は、特別講演を神戸大学大学院人間発達環境学研究所 特命助教 源利文氏に依頼し、「環境DNAを用いた生態系の調査手法と水環境管理への応用可能性」と題して、これからの河川管理のあり方、水環境に関わる施策・研究を生物のDNAから環境把握の可能性について、貴重な講演をいただきました。

河川財団の研究発表としては、「堤防等河川管理施設の点検結果評価要領(案)のポイントについて」、「流域から学ぶ河川教育」「流域」は問題解決のフレームワーク、「河川環境教育プログラムの開発と実践について」の3題を発表しました。さらに基金助成事業成果発表として南山大学理工学部教授 高見勲氏による「排水機場最適維持管理計画策定に関する研究」を発表しました。

### 流域から学ぶ河川教育

#### ・流域は問題解決のフレームワーク・

2014年の広島の土砂災害や2015年の鬼怒川の洪水に代表されるように、近年水に関する災害が多くみられるようになりました。水の関連する自然災害、水利用、水環境に関わる問題は深刻化しています。「流域」は川に関わる人間の活動を含め、自然のメカニズムとの調整が行われる場です。これは水災害や水利用、水環境を考える際のフレームワーク隣、今後問題解決を



1



2



3

流域を学ぶツール、プロジェクト WET  
「木曾川流域版ガイドブック」のアクティビティ

- 1) 木曾川の魚類の生態を「おにごっこ」で学ぶ「魚になって暮らしてみよう」
- 2) 在来植物と外来植物の関係を「陣地取りゲーム」で学ぶ「木曾川流域の招待客」
- 3) 川の水量の変化を「おはじきリレー」で学ぶ「ブルービーズ」

行う際の必須概念になると考えています。

さらには人と自然との関係を学ぶことができ、日本において私たちがどう生きるべきかを考えさせてくれる教材にもなりますが、この概念を学ぶ機会は意外にも多くはありません。

日本の学校教育の根幹にある文部科学省の学習指導要領及びその解説の中で、中小学校においては「流域」という用語は取り上げられていません。高校の世界史との関係で、メソポタミア文明や黄河文明といった古代文明との関係でわずかに記述されているだけです。

本発表では小・中・高の「理科」と「生物基礎」・「地学基礎」の「生命」「地球」を柱とした内容の構成と「水」を系統的に学ぶ際の課題に触れ、欧米における学校教育の状況を紹介しました。諸外国の学校教育においては、流域に限らず水そのものを多面的に学び、発達段階に応じて系統立てて学べるようなカリキュラムがあり、「理科」と「科学技術」または「工学」をつなげ、社会の複雑な課題に対し、その解決策を見つけて出して実践力を養うという教育がなされています。「理科」と「工学」との融合の動きが日本でも進みつつある中で、その工学教育的アプローチの「ツール」として「流域」の概念が活用されることで水・河川リテラシーの向上につながるのではないかと、財団においてツールを開発し提案

しています。

### 河川教育プログラムの開発と実践

河川教育プログラム「プロジェクトWET」は、アメリカで開発された教育者のためのプログラムであり、当財団は2003年にプロジェクトWET財団との合意により日本における唯一の推進母体として認められ、その普及と発展に努めています。

このプロジェクトWETは、教育を取り巻く状況、様々な社会情勢の変化等に対応すべく、ガイドブックを作成、見直しを行ってきました。2011年には、日本で初めて「木曾三川流域」という特定のエリアに限定し、木曾三川流域の子供たちに水環境を学んでもらうための身近な教材として、プロジェクトWETの地域版である「木曾川流域版ガイドブック」の開発に取り組みました。

開発に当たっては、「プロジェクトWET木曾川流域版ガイドブック作成検討委員会」と「ワーキンググループ」を組織し、木曾三川流域内の小学校や公共施設など様々な場面での実施体験を踏まえ、5項目12種のアクティビティを取りまとめ、2014年3月31日にガイドブックを発行するに至りました。

このガイドブックは、木曾三川流域の特徴や水利用・水循環、木曾三川に生息する生物や外来種を含めた自然環境、流域の歴史・文化などを介して、身近にある水について体験しながら楽しく学ぶことができる内容となっています。

ガイドブック発行後の実践としては、環境コンサルタントでのイベント、大学のサマースクール、国営木曾三川公園の河川教育関連イベントなど、環境学習を実施する様々な事業主体により、木曾川流域版プロジェクトWETを実践しました。

今後、木曾三川流域を中心に河川環境教育を実施されている各方面の指導者の皆様方に、本書を活用いただければ幸いに思いますが、ここにその開発過程と実践状況について紹介させていただきます。



プロジェクトWET「木曾川流域版ガイドブック」

木曾川の自然環境、歴史や文化、動植物等について楽しく学べる12のアクティビティが盛り込まれています。それぞれの地域の「流域」について学び、理解するためのツールとして様々な流域でご活用ください。



神戸大学大学院 源利文 特命助教 による特別講演



第10回河川財団名古屋事務所研究発表会の様子



## 堤防植生の生物多様性への役割

近年、公共事業における維持管理が注目されており、河川財団は河川環境管理財団として昭和50年に設立した当初から、河川敷地の利用や維持管理等に関する総合的な調査研究を行い、特に蓄積してきた堤防植生管理に関わる技術的知見等を活用しつつ、河川における維持管理に積極的に取り組んでおります。

今号は、堤防植生の生物多様性への役割に焦点を当て、紹介します。

河川総合研究所

01

**河川堤防の役割と堤防植生に求められる機能**

河川堤防は、洪水から国民の生命・財産を守るための重要な河川管理施設です。永年にわたり、築堤や高上げ等の補修が継続的に行われており、長大な施設となっております。

この河川堤防は植物に覆われており、これらを堤防植生と呼びます。堤防植生に求められる機能は、洪水を安全に流下させるため、流水による侵食に耐えることが必要です。また、河川堤防の維持管理においては、堤防の異状等を発見するために実施する河川巡視や堤防点検における視認性の観点からも堤防植生の管理が重要です。

02

**堤防植生管理の変更による植生の変化**

しかしながら、平成23年における国の維持管理予算の縮減によって、河川堤防では、従来のような高頻度（4〜5回）の刈取りによる植生管理を行うことが困難となりました。

この堤防植生管理のあり方の変更は、堤防植生における外来植物の繁茂・蔓延などの植生変化を招いています。外来植物の優占する河川堤防の耐侵食機能や視認性は、シバやチガヤが優占する河川堤防よりも劣ることが知られています。

このため、河川堤防の治水機能保持を目





日本の四季が感じられる多様性に富んだ堤防植生づくり、地域との協働による堤防植生づくりと堤防維持管理を目指す「七草堤防プロジェクト」

的とした維持管理の観点から、望ましい植生を維持・誘導するための効率的な堤防植生管理が求められています。

### 03 河川堤防における生物多様性

平成20年に「生物多様性基本法」が制定されました。これまで外来植物対策を行ってきた河川堤防には、局所的ながらも日本の四季を感じられる多くの在来植物が存在し、そこには多種多様な生物が生息していることが確認されています。このため、堤防植生の管理を通して、生物多様性の観点から堤防植生の質を高めることも期待されます。

### 04 事例紹介「七草堤防プロジェクト」

利根川下流部では、東日本大震災の被災後に復旧した堤防に、地域の人々と協力して、堤防植生の治水機能の確保を前提としながら、地域の在来植物を植え付け・管理する実験的な取り組みが行われています。

日本の四季が感じられる多様性に富んだ堤防植生づくり、地域との協働による堤防植生づくりと堤防維持管理を目指す本取り組みは、「七草堤防プロジェクト」との愛称で呼ばれ、地元中学校、自治体、ボランティア、河川事務所による連携体制を構築しています。この活動は、これからの地

域を担う中学生の貴重な体験であり、植生だけでなく、堤防への理解や興味・関心を抱かせる機会となる有意義かつ大切な取り組みとなっています。

これらは、河川財団主催の河川研究セミナーおよび日本緑化工学会大会において発表した内容をとりまとめたものです。

河川研究セミナーは、国の研究機関やコンサルタント等の専門家を講師に迎え、河川の最新テーマについて講演していただいております。第1回は、平成28年6月22日に開催し、86名の方々に参加いただきました。「堤防植生管理の現状・課題と対策」と題し、河川堤防の維持管理について、近年における外来植物の繁茂による河川巡視・堤防点検への支障や堤体機能の弱体化などの問題が発生していることを踏まえ、堤防植生管理の現状と課題を整理し、対策（案）を提案しました。講師は、当財団の山田政雄、山本嘉昭が担当いたしました。

また、日本緑化工学会主催の第47回日本緑化工学会大会（平成28年10月2、3日開催）の、研究集会「河川における生物多様性に配慮した堤防植生管理」において、本集会の発起人である東京大学 山田晋助教をはじめ、東京学芸大学 小柳知代講師、当財団の八木裕人、山本嘉昭が、河川の堤

防植生に関する話題提供を行いました。この研究集会では、河川堤防における植生管理に関するこれまでの経緯や、河川堤防に残存する在来植物の現状、堤防植生管理の新たな取り組みを概観することで、今後の生物多様性にも配慮した河川堤防の植生管理の可能性を探ることを試みました。



日本緑化工学会主催 第47回日本緑化工学会大会



河川財団主催 河川研究セミナー



# 天然記念物イタセンバラの保全に関する調査・研究 淀川管内の河川レンジャーの近年の取り組み

河川財団近畿事務所研究成果発表会概要報告

近畿事務所



3



2



1



4



6



5

多くの関係者で展開される天然記念物イタセンバラの保全活動

1) 外来魚駆除活動 2) イタセンバラ放流 3) イタセンバラ放流式 4) イタセンバラのモニタリング調査 5) 子ども達によるイタセンバラ放流 6) イタセンバラ成魚

河川財団では、健全な河川生態系の保全・再生に関する調査・研究を推進しており、その中の一つとして、天然記念物であるイタセンバラの保全に関する調査・研究に取り組んでいます。平成28年11月30日に開催した河川財団近畿事務所研究成果発表会では、野生復帰のためにイタセンバラの生息環境の改善と再導入の取り組み及び継続的あるいは近年の保全の取り組みを中心に報告されました。

さらに、淀川管内の河川レンジャーの近年の取り組みとして、①大学生を中心とした河川レンジャーとハンブルク青少年消防団との防災をテーマとした国際交流、②桂川右岸羽束師地区の住民から相談を受け、地域版の防災マップの作成を支援した活動等、活動内容が年々進化していることが報告されました。

その他に、特別講演の1題と河川基金助成事業成果の6題でした。

特別講演は、当財団のプロジェクトフェローである京都大学防災研究所 中川一教授をお招きし、『淀川の治水安全度と河川堤防研究』と題して破堤のメカニズムや今後の対策等についてご講演をいただきました。

河川基金助成事業成果の発表では、118題の中から選ばれた研究『底面せん断応力計測による河道内樹木群落の粗度係数評価法の高精度化と樹木維持管理コスト



### 地域住民に愛され、利用される淀川を目指して（切り下げ区域意見交換会）

- ・ 立ち入りを禁止していた高水敷の切り下げ区域について、地域住民や河川管理者等との意見交換会を開催し、今後の利用・整備計画を作成
- ・ 河川管理者により、利用・整備計画を反映した工事が実施され、切り下げ区域への進入が可能に
- ・ その後も外来植物の除去活動や維持管理を考える意見交換会を継続
- ・ 活動に協力していた大学生を中心に、グループ河川レンジャーを結成。近隣の中学校を巻き込んだ活動を展開中



### 姉妹都市 大阪とハンブルクを結ぶ防災の絆

平成 20 年に政府が主導する「日独学生リーダー事業」を契機にハンブルク青少年消防団と大阪の青少年の交流がスタート。平成 24 年からは河川レンジャーが企画し、1 年毎に大阪・ハンブルクを相互に訪問しあい、防災を軸とした国際交流を実施。平成 27 年度からは大学生も企画・運営に参加。平成 28 年度はハンブルク青少年消防団が来日し、国土交通省近畿地方整備局、大阪市、大阪市議会、淀川区を表敬訪問しました。



### ドイツの消防団の取組み

ドイツには、常備消防隊と義勇消防隊、事業所消防隊があり、その義勇消防隊の青少年組織として青少年消防団が存在しています。青少年消防団には 10 歳（地域によっては 12 歳）から加入することができます。ハンブルク青少年消防団は、921 人（内女性は 163 人）で、13～15 歳が全体の 4 割を占めています。ハンブルク市内には、87 の自営消防団の消防署があり、各団の平均人数は 16.4 人となっています。活動としては、消防活動にかかる勉強や訓練、水上訓練、ナイトウォークやサッカーなどを行っており、活動を通じて青少年の育成が行われます。



京都大学防災研究所 中川一教授による特別講演



活発な意見交換

削減に関する研究』、『淀川水系中流域における病原微生物と指標微生物の動態の比較』、『福島原発事故で沈着した放射性セシウムの森林から河川への流出に及ぼす懸濁態・溶存態有機物の機能に関する調査研究』、『ハビタット・ジェネラリスト底生生物における遺伝的多様性ホットスポットの可視化』、『河岸植生の進入過程を考慮した樹林化モデルへの開発と応用』、『マルチコプター撮影映像の知的画像解析による河川現地計測の新展開』の計 6 題の成果を発表していただき、活発な質疑応答が、掘研究アドバイザー、池淵研究フェローの進行により行われました。

国、地方自治体、企業、研究機関などから約 100 名の方が参加され、発表や講演に対して多くの質問・意見を頂き、本会の内容に大変満足したというご意見も頂きました。

最後になりましたが、発表者や講師の方々、ご参加いただきました皆様、誠にありがとうございました。



平成 26 年 10 月に東京都では最初の日本パークゴルフ協会公認コースとして  
オープンした扇パークゴルフ場

パークニュース



## 三世代（親・子・孫）が同じフィールドで 楽しめる手軽なスポーツ、パークゴルフ

河川財団では河川健康公園運営事業として、貴重なオープンスペースである河川敷を活用し、水辺環境の向上を図るとともに、スポーツや河川学習・レクリエーションが行える場所や機会を提供し、あらゆる年齢層の皆さまの健康増進や次世代を担う子どもたちの健全育成を図っています。

東京事務所

名古屋事務所

パークゴルフとは

パークゴルフは、専用のクラブ（長さ85cm）でボール（直径6cm、重量80〜95g）を転がしてカップ（約20cm）に入れるまでの打数を競うスポーツで、1983年に北海道十勝支庁幕別町で生まれました。クラブ1本でプレーできる手軽さと、誰でも簡単に始められるシンプルルールであることから、子供から高齢者の方まで楽しむことができる三世代スポーツとして広く親しまれています。公園で始められた遊びなので「PARK GOLF」と名付けられました。

パークゴルフの魅力は、その手軽さだけでなく、緑の芝地の中で適度な歩行運動を行うことによる健康増進効果や地域社会および世代間のコミュニケーションの促進、競技や仲間との交流を通じた青少年の健全育成、土地の有効利用など様々な効果が注目されています。その愛好者数は、全国で125万人といわれ、発祥地である北海道では非常に盛んに行われていますが、全国的にはまだ浸透しておらず、東京や名古屋ではプレーできるパークゴルフ場はあまりありませんでした。

河川財団では、荒川および庄内川の河川敷にある荒川・扇河川健康公園と庄内川・幸心河川健康公園の高水敷広場をより魅力



## 名古屋市内ではじめてオープン

庄内川・幸心河川健康公園パークゴルフ場

平成28年8月にオープンした、  
名古屋市内で最初（愛知県内では4番目）  
の日本パークゴルフ協会公認コース

ある施設にするとともに、地域の皆さまのさらなる河川利用の促進と健康増進を図ることを目的として、『荒川・扇河川健康公園パークゴルフ場』および『庄内川・幸心河川健康公園パークゴルフ場』をオープンしました。どちらも18ホールを備える本格的なパークゴルフ場として都市部に設けられた施設ですが、都市環境にしながら河川敷ならではの解放感と緑に囲まれて伸び伸びプレーすることができます。

### 扇パークゴルフ場から

日暮里・舎人ライナー「扇大橋駅」から徒歩10分の交通至便な所に、平成26年10月に東京都では最初の日本パークゴルフ協会公認コースとしてオープンしました。荒川越しに東京スカイツリーを望み、都市環境にしながら河川敷ならではの解放感と緑に囲まれて体を動かすことができます。

当施設では、オープン以来、少しでも多くの方にパークゴルフの楽しさを知っていただくため、毎月、講師の方を招いて初心者講習会を開催しています。講習会では、基本的なルールやマナーを学び、実際にラウンドしながらショット、バター、アプローチまで習得できる内容となっております。毎月30名程の方々にご参加いただいております。

また、気軽に親しんでいただく機会を作

るために、足立区在住の65歳以上の方を対象に1ラウンドを無料でお試しいただけるチケットを発行し、3ヶ月間でおよそ600名の方にご利用いただきました。これをきっかけにパークゴルフを始め、継続的にお越しいただくようになったお客様も多くおり、皆さんグループで楽しそうにラウンドしています。

お客様がまた訪れたいと思うような利用環境や美しい河川景観作りも普及活動の1つと捉え、四季を感じる花木の植栽や荒川の水面が見えるよう河岸の除草、綺麗な女性用トイレ、ロッカー等の設置を行い、利用しやすい環境づくりに取り組みました。このような普及活動を行った結果、利用者は順調に増加しており、近隣にお住まいの方だけではなく遠方から足を運んでくださる方も増えています。

今年の11月には、「第2回扇河川健康公園パークゴルフ場東京大会」を開催することができ、大会当日は天候に恵まれ、平日にも関わらず50名以上の方々にご参加いただきました。参加者の年齢は20歳から83歳と幅広く、世代を超えて交流を深め、大変楽しい時間を過ごすことができました。

今後もさらにパークゴルフの楽しさを広め、人々の健康増進に寄与するとともに、地域の皆様が集い交流を深める場所となる

よう、魅力ある施設をめざして参ります。

### 幸心パークゴルフ場から

平成28年8月27日、名古屋市内で最初の日本パークゴルフ協会公認コースとして『庄内川・幸心河川健康公園パークゴルフ場』がオープンしました。

オープン記念イベントには、一般参加と愛知県パークゴルフ協会会員の皆様合せて70名以上の方にご参加いただき、始球式はじまりルール、マナー講義や実技練習を行いました。式典後には無料開放を行い、近隣の方々をはじめ、多くの皆様に真新しい公園の芝生の感触を楽しみながらプレーをしていただくことが出来ました。

オープン後は、近隣地域の方々に加え、他県からのお客様も利用されるようになり、来場者数は増えてきています。

パークゴルフ普及への取組みの一環として、年明けには、名古屋では初となるパークゴルフ大会の開催や、初心者講習会等の各種イベントの開催を予定しています。

今後も、公園利用の皆様の健康を支える場として、安全で安心してご利用いただける公園づくりをめざして参ります。

川には、様々な生き物が見られ、子どもはもちろん大人にとっても魚釣りや自然観察、水遊び、バーベキュー、ボートやイカダなど一年を通じてたくさんのお楽しみ活動ができます。

しかし、警察庁「平成27年中における水難の概況」によると水に関わる子どもの死亡事故の約6割は川や湖で起こっています。川に入るつもりが無くとも、足を滑らせて流されたり、一見穏やかな流れの場所でも急に深くなったり流れが複雑になったりします。

ひとたび水辺の事故に遭遇すると、こうした楽しさは全て奪われてしまいます。川や水辺に潜む様々な危険性を知り、事前の準備と、活動時の安全管理をする事で、事故を防ぐことができます。

当財団では河川水難事故に関する調査研究を長年行っています。その分析によればこの10数年間水難事故の死者数に大きな変化はなく、毎年同じような事故が繰り返して起きています。

当然のことながら、魚類と違い、人間は水の中では呼吸をすることができません。水の中で活動しようとするためには、常に頭部を水面から出して呼吸をする必要があります。特に河川においては水面下に様々な複雑かつ強い流れがあり、陸上からの目視ではなかなか判別しにくい深みがあります。

河川教育



## 水難事故防止に向けた広報

子どもの水辺サポートセンター



このような環境下で頭部を水面上に出し続けるには人間の持つ浮力だけでは限界があり、何らかの形で浮力を補う必要があります。その最も効率的で有効な手段がライフジャケットを着用することです。河川における水難事故を防止するには、「川のシートベルト」と呼ばれるように、ライフジャケットを着用することが第一です。

平成28年度当財団ではNHKやTBS、日テレをはじめとしたテレビ、新聞、ウェブマガジン等への取材協力・映像等の資料提供などを通じ、ライフジャケット着用の啓発活動を行いました。特に、当財団及びNPO法人川に学ぶ体験活動協議会が撮影に協力したNHK教育テレビ「子ども安全リアルストーリー」の「水の事故」では子どもだけで川に遊びに行く際に起こりうる事故や川に潜む危険を取り上げ、ライフジャケット着用の重要性等を紹介しています。この番組はテレビ放送だけでなく、NHKのウェブサイト「NHK for School」でも閲覧することができ、学校の授業でも活用できるような様々な資料などもダウンロードすることができます。

今後も河川財団では、水難事故の防止に向け、より一層の広報活動を続けてまいります。

### NHK for School 子ども安全リアルストーリー

子どもたちに起こるかもしれない身近な危険について、実際にあったケースをおりませながら再現ドラマでエピソードを紹介。

平成28年8月に放送された第5回「水の事故」では、実際の事故例を参考に、川で溺れそうになる様子をリアルなドラマで紹介。川に潜む危険や、溺れないための対策を伝える。

[www.nhk.or.jp/sougou/anzen/](http://www.nhk.or.jp/sougou/anzen/)

河川基金



## 河川基金発表会のお知らせ

平成28年度「川づくり団体全国事例発表会」および「河川教育研究交流会」の開催

基金事業部

河川財団が運営する河川基金助成では、人々の川への理解が深まり、人と川との良好な関係がさらに強まることを目指して、より良い「川づくり」に貢献する研究者、市民団体、学校などの活動を支援しています。

今回は平成27年度に完了した助成事業の成果について、広く市民団体、行政、民間企業、学校などの皆さまと情報共有・意見交換をするとともに、今後の活動の参考として頂くことで皆さまの活動が一層充実したものとなるよう、発表会・研究交流会を開催します。多くの皆さまのご参加をお待ちしております。

なおプログラムの詳細等は、河川財団のホームページをご覧ください。

### 川づくり団体全国事例発表会

人々の河川や流域への理解を深めたり、川を健全な姿に変えるための活動などを行う市民団体等（川づくり団体）の助成事業の成果発表等を行います。

平成29年2月3日（金）13:00～17:20

場所：東京大学 山上会館



### 河川教育研究交流会

学校教育の現場において、河川・流域を通じて防災や環境等を学習する「河川教育」に取組む小・中学校等の助成事業の成果発表を行います。

平成29年2月4日（土）9:30～15:30

場所：東京大学 山上会館



## ご寄付のお願い

### 河川基金へのご寄付について

河川基金（平成 28 年度助成事業より、名称を「河川整備基金」から「河川基金」に変更）は、民間の協力を得て河川整備を緊急に推進するため、政府の閣議了解に基づき昭和 63 年に設立されました。

河川基金では、その運用益をもちいて、河川に関する様々な調査・研究、市民団体等の川づくり団体が行う河川への国民の理解を深める活動、学校教育の現場において河川・流域を通じて環境・防災・歴史文化等を学習する河川教育の支援をしてきています。今後も、よりよい「川づくり」に役立つ様々な活動に支援を行うことにより、人々の河川への理解が深まり、人と川の良い関係がさらに強いものとなることをめざします。

このような河川基金の趣旨をご理解いただき、本基金のさらなる造成のためにご協力をお願い申し上げます。



河川基金

### その他の当財団事業へのご寄付について

当財団の事業に必要な資金は、河川基金の運用収入により実施している助成事業を除き、主に事業収入により実施していますが、今後さらにこれらの活動を充実させていくためには、当財団の事業にご理解とご賛同をいただいた方々からのご寄付が貴重です。ご協力をお願い申し上げます。皆様からいただく寄付金は、本財団の「寄付金取扱い規程」に則り、有効に使用させていただきます。

詳細は河川財団 HP をご覧ください。

河川財団

検索

### 寄付金の税法上の優遇措置について

当財団は、内閣総理大臣より「公益財団法人」としての認定を受けております（認定日は平成 25 年 3 月 21 日、法人登記日は同年 4 月 1 日）ので、当財団への寄付金には上記の河川基金への寄付金及び一般寄付金のいずれについても特定公益増進法人としての税法上の優遇措置が適用され、所得税（個人）・法人税（法人）の所得控除等が受けられます。

## ご寄付の御礼

### 河川基金へ寄付いただいた皆様へ

平成 28 年 1 月 1 日から平成 28 年 12 月 31 日までの一年間に「一般財団法人 宮崎大淀川スポーツセンター」や「釧路・リバー・プロテクション・21 の会」をはじめとする、団体や個人の皆様から 2,590,928 円のご寄付をいただきました。寄付者の皆様にご心より御礼申し上げます。ご厚志につきましては、河川基金として管理し、その運用益を河川の治水・利水・環境に関する調査、川づくり団体の活動や学校での河川教育を支援する助成事業のために有効に使わせていただく所存でございます。

### 一般寄付をいただいた皆様へ

平成 28 年 12 月 13 日に多摩市の甲村謙友様からご寄付をいただきました。心より感謝申し上げます。ご厚志につきましては、寄付金取扱規程により管理し、「調査研究」「助成」「河川教育」「河川健康公園」の公益目的事業に有効に使わせていただく所存でございます。



公益財団法人

河川財団

#### 本部

総務部

経営企画部

TEL:03-5847-8301

TEL:03-5847-8302

FAX:03-5847-8308

FAX:03-5847-8308

基金事業部

子どもの水辺サポートセンター

TEL:03-5847-8303

TEL:03-5847-8307

TEL:03-5847-8304

河川総合研究所  
(戦略的維持管理研究所)

東京事務所

TEL:03-5847-8306

FAX:03-5847-8309

FAX:03-5847-8314

FAX:03-5847-8310

FAX:03-5847-8310

#### 本部

〒 103-0001 東京都中央区日本橋小伝馬町 11-9 住友生命日本橋小伝馬町ビル (2F)

http://www.kasen.or.jp

E-mail:info@kasen.or.jp

#### 名古屋事務所

〒 463-0068 名古屋市守山区瀬古 3 丁目 710 番地

TEL052-388-7891 FAX052-388-7918

E-mail:info-n@nagoya.kasen.or.jp

#### 近畿事務所

〒 540-6591 大阪市中央区大手前 1-7-31 (OMM13F)

TEL06-6942-2310 FAX06-6942-2118

E-mail:info-o@osaka.kasen.or.jp